

中部人懇通信 No.2

教育行政
職員対象

平成27年7月4日(土)に、教育行政担当職員及び人権推進員を対象とした中部地区人権教育懇談会を開催しました。その内容を報告します。

1 講演『「ひとごと」から「わがこと」へ ～自己をみつめ、語り、他者とつながる人権学習～』 徳島県板野郡藍住町立藍住中学校教諭 森口 健司 氏

森口先生には、「ひとごと」から「わがこと」へをキーワードに、「わがこと」としてものごとを捉えるようになるためのヒントや生き方を実践や映像資料をもとに御講演いただきました。

(1) 人権劇「スダチの苗木」について(あらすじは次ページ)

この「スダチの苗木」は、森口先生の学生時代の実体験をもとに、とりわけ父親の職業へのこだわりから出自を隠そうとする主人公の心の葛藤を描いた作品である。部落差別の現実が背景にあり、自分の生き方を学ぶ教材として多くの中学校で人権劇として取り組まれている。

(2) 石川一雄さん(狭山事件)との関わりから

石川さんとの関わりから、「私たちに問われている生き方は、世の中の問題をきちんと解決していき、そして自分に何ができるかを問い続けていくことではないか」と教えられた。

【石川さんと看守さんとのエピソード】

「刑務所で過ごした31年の中ですばらしい看守さんに出会えた。看守さんは私の無罪を世間に知ってもらうために文字を使って訴えるべきだと教えてくれた。そのため看守さんは私に文字の書き方を教えてくれた。練習のためのちり紙も用意してくれた。のちに、看守さんは文字を教えたことで世の中の間違いを正し、真実を述べて生きる生き方を自分の娘に教えていくことができたと言ってくれた。」

(3) いつも心に響いている言葉がある

「悲しみが見えないで幸せが見えるか」教育は信頼と尊敬である。自分は本当に子どもを信頼しているか、尊敬しているか、子どもたちと本当にそういう関係ができているか問うている。

【恩師佐藤文彦先生の言葉より】

- ・雨が避けられないとすると、その雨を両手で受ける以外にありません。そしてその雨のおかげでこんな日になったんだというような日を作り出す。それ以外に道はありません。
- ・自分は足が不自由でいつもかけっこではビリだった。自分は到底一番にはなれないだろうが日本一のビリッ子になってやろう。ビリッ子だからといってぶつぶつ言うまい。ビリッ子であることを避けようとしたり、ごまかそうとしたり、そんな生き方はしない。雨の日には雨の日の生き方があるように私には私であることの上に生きる生き方がある。

2 全体学習

地域での人権教育や人権教育に対する自分自身の思いを参加者がマイクを回して、次々と全体の中で話をしました。思いを語るができる雰囲気作りが何より大切であることを学びました。

【参加者の感想より】

- 森口先生の体験を聞き、私にも同じような体験があったことを思い出した。自分自身を語ることで豊かな人間関係が築けること、そして、差別をなくす取組につながることを実感した。
- 「自分が自分を語る」本当にこれが自分事として考えるきっかけになると思う。
- 森口先生のパワフルなお話を聞くことができてよかった。「生き方は変えることができる」という言葉や狭山事件の石川一雄さんの話を家族にも話したいと思った。
- 小地域懇談会の充実というテーマであったが内容が沿わなかったのではないかな。
- 小地域懇談会が盛り上がりがないという実態はどこにでも見られることだが、お話を聞き、地域内で人との繋がりが弱ければ人は集まらないことがわかった。

【まとめ】

森口先生からあたたかく勇気の出る言葉をたくさんいただきました。その中で自分を語ることができているか振り返るよい機会となりました。また、人との出会いの中で関係性を築き、語り合い、心



が揺さぶられ、自分はこうなりたいという思いを持つことが人権学習であることも再確認できました。地域でも学校でも語り合える仲間づくりを目指していきたいと思いました。

人権劇「スダチの苗木」 森口健司 原作

《あらすじ》

被差別部落に育った私は、父の日雇い労働という職業がいやで仕方がなかった。以前の私はそんな父の姿が無性に悲しかった。そして、京都で過ごした学生時代は、自分のことさえも堂々と語るができなかった。

ある日、大学の友人達が、被差別部落のことをよく知らず、偏見に満ちた会話を始めた。私も意見を求められたが、自分の考えを少し述べるだけで会話に参加することが怖かった。また、親代わりの下宿の女将さんさえも「関わらん方がええよ」という態度をとる。このような中で、部落出身であることを伝えられない私は自己を責め、苦悩する。そして、中学時代の友人に電話をかけ、今日のことを打ち明ける。話すうちに中学時代の懐かしい思い出が甦る。私と友人は中学校で部落問題について学んだ後、「部落差別は部落外の人がする問題であるから、部落外の人の中に理解者を増やしていくことが大切である」と痛感したのだった。そのための同和教育の必要性を感じ、私は教師になることを決意した。

大学の卒業式が終わり、徳島に帰るため父親が下宿へ荷物を取りにくるという。私は強く拒否したが言って聞く父ではない。本当は自分の父を、友人に紹介することがいやだったからであるが、そのことは両親には言わなかった。父は、下宿に到着するとお世話になったお礼にと、「スダチの苗木」を差し出した。私は、はじめ少し驚き、不機嫌そうに父の服装や手土産のことを非難した。女将さんが私を叱った。私は父に背を向けたままで、植えるのを手伝おうとしなかった。当時の私は、部落のことや自分のことを打ち明けてこそ、本当の付き合いができることを分かっていたはずなのにそれができなかった。京都での四年間は、最後までそのような状態だった。

ふるさとに帰って数ヶ月経ったある日、在学中に父が何ヶ月か入院していたことを初めて知った。それは、私を心配させまいとする両親の思いからであった。「子どものために」ということを決して口にせず、命を削り、ひたむきに働き続けた父母に私の心は激しく震えた。

今でも人生の節目には京都の下宿を訪ねる。その度に女将さんはしみじみと語ってくれる。「ご家族の皆さんはお元気ですか。お父さんの持ってきてくださったスダチの苗木は立派に育っています。花はまだ咲きませんが、あの木を見る度にあなた方のことを思い出します。」スダチの白い花が咲くころになると、私はきまって父が植えた苗木のことを思い出すのである。

